

はじめに

今月上旬の11月1日夕方から4日午後までの丸3日間、佐々木昭子さんと共にハンガリーのブダペストに行きました。第1回佐々木吉三郎杯に参加するためです。1日の夕方に空港に着きましたら、昭子さんには花束の、私にはワインのプレゼントがあり、それに写真撮影が入るといった歓迎ぶりでスタートしました。ホテル到着後も夜の晩餐会があり、3日間のスケジュールがびっしりと組まれておりました。結果的には、計4カ所を回り、各地で多々の行事がありました。

今回、旅行の全てを皆さんにお知らせするのは、なかなか大変な作業です。そこで、私が新たに学んだこと、佐々木吉三郎杯の様子、感激したこと、等を、ごくサラッとお知らせするに留めます。昭子さんとすでにお電話等で話された方も多いと思いますが、このメモで書いたことや書くことが出来なかったことを、昭子さんを通じてすでに得ておられる方もおられるでしょう。そういった情報とも合わせてお読みいただければ幸いです。

吉三郎さんの本を巡って

ちょうど百年前に吉三郎さんの本が刊行されましたが、本を巡る新しいことを、今回の訪問の合間にいくつか学びました。

まず、本の中に掲載されている多くの写真の原版がハンガリースポーツ博物館において見つかったことです。その館長さんのサボ(Szabó Lajos)さんがヅィマニ(Zimányi Magdolna)さんにこのことを知らせたようです。ヅィマニさんは、この本を2年前に発見したときにお世話になった方です。原版のスキャンを以下に掲載します。一つ目(図1)は吉三郎さんの写真です。この写真を巡って、これはどこで撮影されたのかが随分と議論なったようです。

訪問2日目は、これらの写真の右の建物に一番似ている建物のレストランで昼食がアレンジされました(もちろん、全く別の場所で

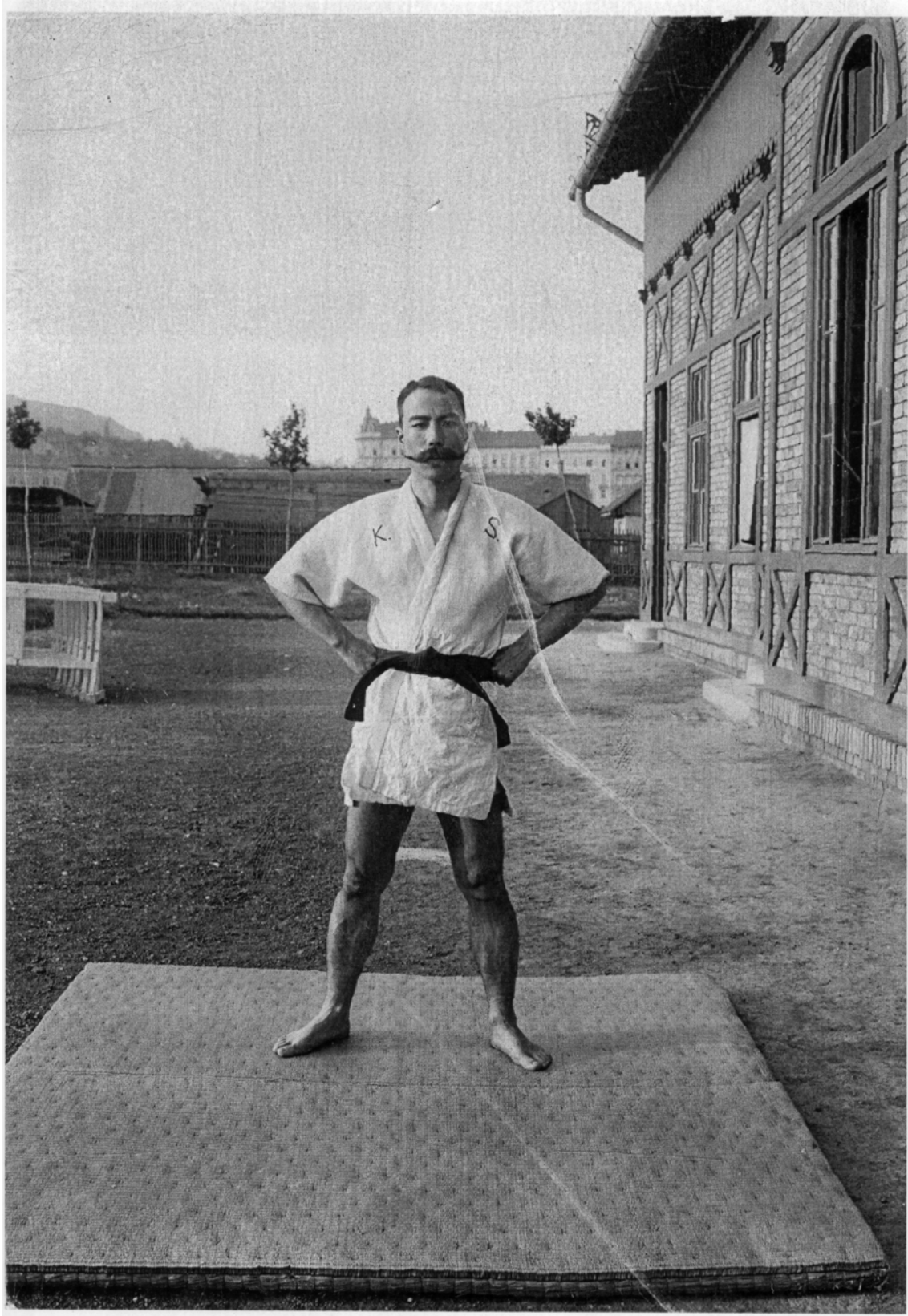


図 1 : 吉三郎氏の本「Djudo」の中の写真原版のコピー。

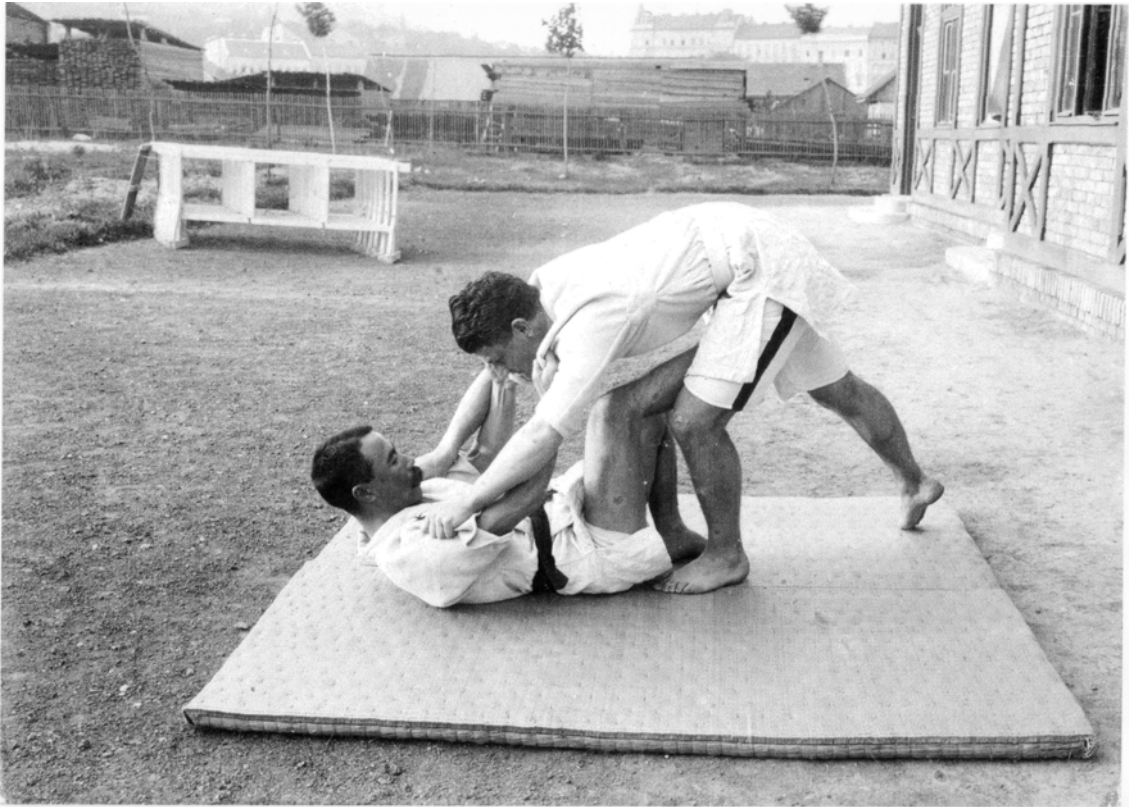


図 2 : Djudo の本の写真原版でニーデンバッハ氏との取り組み。

すが)。

二つ目(図 2)は吉三郎さんの本の 91 ページの図 40 にある写真ですが、ナイデンバッハ (Neidenbach Emil, 1884-1957) という方と組んでいる写真です。この方は、吉三郎さんが招聘を受けたブダペスト大学運動クラブのメンバーで、当時、高等学校で体育・数学・物理の教鞭をとり、ハンガリースポーツ界で非常に重要な役目を果たした人とのことです。この人が 1931 年に著した「体育と科学」という本の中には数ページに亘って吉三郎さんとの体験が書かれているらしいです。次回にブダペストを訪れるときには、スポーツ博物館を訪れ、また、この本の内容を学んでこようと思います。

吉三郎さんを招いたのは、本の「あとがき」にも書きましたが、セメレ (Szemere Miklós, 1856-1919) さんという貴族の方です。日露戦争においてなぜ日本が強国ロシアに勝ったのであろうかと色々

と考え、その秘密は柔道にあるのではないかと思ひ至り、日本から柔道を輸入することに決めた方です。当時は、オーストリア・ハンガリー大帝国の時代であり、日本大使はウイーンに滞在しておりました。そこで、ウイーンの大使・牧野伸顕氏を通じて講道館に招待状を送りました。ちなみに、この牧野伸顕氏は、大久保利通の次男にあたる人で、彼の長女が吉田茂に嫁いだという政治家でもありました。この招待状が届いたのが 1906 年の 1 月で、吉三郎さんがブダペストに着いたのは同年の 3 月でした。

今回訪れて分かったことは、このセメレさんという方は、ハンガリーでは超有名な方だということです。この方は、生まれが貴族なので元来お金持ちなのですが、トランプゲームが大好きで、その賭けで莫大な財産を築きました。さらに、その莫大な財産を土地購入にあて、ブダペストの一角にセメレ地区を作りました。この地区は今でも存在しています。そこに、労働者階級を呼び、土地を無償で与え、住まわせました。そういった意味で、労働者階級からも大きな支持を得て、国会議員も務めました。

セメレ氏の若いときの写真と大物になった後の写真を掲載します。

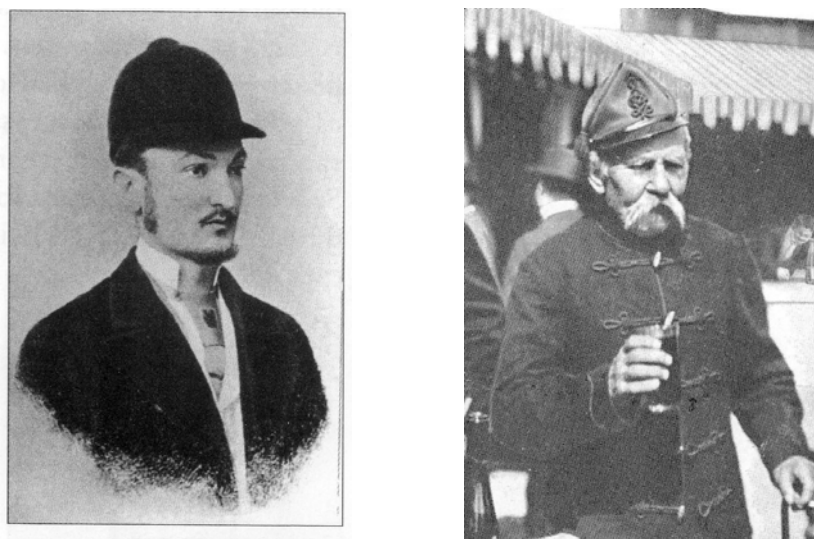


図 3 : セメレ氏の写真 (左が若い頃で、右が有名になったあと)。

吉三郎さんの本はセメレ氏に捧げると書かれております。また、実際にハンガリー語で執筆したのはシュパイドル (Speidl Zoltán,

1880-1917) という方です。今回、セメレさんとシュパイドルさんの子孫の方が来て下さいました。図 4 と図 5 に写真を載せます。



図 4：セメレさんのお孫さん。
この方のご主人は国会議員で、とても快活な方。セメレさんの伝記を古本屋で見つけて、プレゼントしてくれました。ただし、ハンガリー語なので、友人に読んでもらっています。右は今回の主催者のオジュバーさん。



図 5：シュパイドルさんのお孫さん（左から 2 番目）。名前が、お爺さんの **Speidl Zoltán** さんと全く同じ。その左は、娘さん。右端は、本を見つけるときにすっかりお世話になったヅィマニ夫人。

吉三郎さんの本を巡って、私も昭子さんも、一体どこで柔道を教えたのだろうかということが気になっておりました。今回の佐々木吉三郎杯は、ハンガリー柔道協会のオジュバーさんが中心になって企画されましたが、オジュバーさんは私達をその場所に連れて行ってくれました。ブダペスト大学運動部です。図 6 に写真を載せます。実は、2 年前にこの本が見つかった折に、私はブダペストで物理学の国際委員会に出席しておりました。その委員会の会場は、なんとこ

の運動部のすぐ隣でした。当時はそのことを知りませんでしたが、今回訪れてみて感慨深いものを感じました。



図 6：ブダペスト大学運動部（BEAC, B はブダペスト、E は大学、AC は Athletic Club）。真ん中はオジュバーさん。

最後になりますが、吉三郎さんの本が見つかって以来、ハンガリーではハンガリーにおける柔道の歴史を書こうという機運が高まり、ここ百年の柔道の歴史が執筆されているとのことです。どんな本になるか楽しみにしています。

佐々木吉三郎杯と日本紹介

前置きが長くなりましたが、今回の訪問の本題である佐々木吉三郎杯の様子を次にお知らせしたいと思います。会は2日目の11月2日に開催されました。まことに力の入ったイベントで、主催者のオジュバーさんは、ここ6ヶ月間、朝から晩までこのことにかかりつきであったとのことです。会計のことはあとで触れますが、4月末にオジュバーさんに私たち親族からの寄付金をお送りしましたが、この寄付金がきっかけになって急速に動き出したようです。

その甲斐があっただけで、本当にすばらしいイベントでした。

11月2日は、まず午前中の少年少女の柔道大会から始まりました。
会場やいくつかのスナップ写真を、まず掲載します。





図 7：11 月 2 日午前中の少年少女大会。みんなの表情が明るく、とても楽しい大会でした。上の写真の左はドイツから来たノアクさんで、本大会のスポンサーの一人。

その後、午後になって日本文化の紹介が始まりました。合気道、空手、等の紹介に始まり、舞踊、日本音楽、等もあったようですが、この日は丸一日長い予定が入っていたので、昭子さんと私は昼食後ホテルで休息を取り、夕方になって会場に出かけました。

午後 5 時、正式に佐々木吉三郎杯が始まり、何と、まず私の挨拶から始まりました。この挨拶はチョルゴ (Csörgő Tamás) さんという、本の発見から今まですっかりお世話になった私の友人がハンガリー語に翻訳してくれました。この全文がハンガリーの雑誌に掲載されるそうです。そして、その次に挨拶されたのが、国際柔道連盟の会長をしておられるヴィゼル (Viser Marius) さんでした。この方は、今回の佐々木吉三郎杯の催しを主催したオジュバーさんに、国際柔道連盟から金メダルを贈呈しました。これには、オジュバーさんもすっかり感激し、その後大切そうに、このメダルを身の回りに

ずっと持っておられました。スポーツ界の方々の写真を掲載します。



図8：佐々木吉三郎杯にお見えになったスポーツ界の方々。左から2番目の方が、国際柔道連盟会長のヴィゼルさん。その右は、ハンガリー IOC 会長のシュミット（Schmitt Pal）さんで、フェンシングで2回金メダルを取った人。一番左は、たしか柔道の重鎮の方ですが、名前は忘れました。一番右がオジュバーさん。

今回のハイライトは、何と言っても日本対ハンガリーの柔道の試合でした。日本から参加したのは、コーチの中村行成さん（世界チャンピオンになった人）が率いる総勢8名のチームでした。図9に全員の写真を載せます。一方、ハンガリーは、35才になるとはいえオリンピックで金メダルを獲得し今まだ現役のコバッシュさん（Kovács Antal）をはじめ、かなりの強豪が並びました。2回試合が行なわれましたが、残念ながら、3勝2敗2引き分けといった感じでどちらもハンガリーが勝ちました。その中で、私が最も印象深かったのは、本郷光道君とコバッシュの対戦でした。1回目はコバッシュさんに負けてしまいましたが、2回目は本郷君が勝ちました。どちらの試合も手に汗を握る試合展開で、どちらが勝ってもおかしくない対戦



図 9：ホテルでの日本チーム。左から中村行成コーチ、齋藤俊君（90kg 級）、本郷光道君（100kg 級）、法兼真君（81kg 級）、佐藤武尊君（100kg 超級）、千葉大介君（73kg 級）、村山洸介君（60kg 級）、横口大志君（66kg 級）。選手は村山君（25 歳）を除き全員 22 歳。



図 10：試合前の挨拶。右から 2 番目がコバッシュ選手。

でした。本郷君が金メダルのコバッシュさんに勝ったというニュースはハンガリー中に広がり、あくる日、本郷君はインタビューに応じていました。



図 1 1 : 金メダルのコバッシュさんに勝った直後の本郷君。汗びっしょりで、やったという感じでした。



図 1 2 : 対抗試合後の表彰式。

以前に、この佐々木吉三郎杯のホームページがあることをお知らせしました。このホームページは

<http://www.sasakikupa.hu/>

ですが、ここをクリックすると、今は下のような画面が出てきます。



図 1 3 : 現在の佐々木杯のホームページ。

すなわち、日本とハンガリーの選手の対抗試合の詳細が画面に出ってきます。また、この画面からは「きょうつけ、礼」という声のあとに音楽が流れますが、今回、この音楽を作曲したネメス（Németh Sándor）さんにお会いしました。とてもダイナミックな明るい方で、あとで述べるエゲラグの訪問の際も、現地で再度お会いしました。レスリングの選手だそうです。



図14：佐々木杯において作詞作曲を担当したネメスさん。CDもいただきました。

最後に、会計のことを一言。佐々木ファミリーが寄付をお送りしたのは今年の5月初頭でした。実は、それをお送りすることを知らせた4月末ごろから、オジュバーさんは急遽この佐々木杯に向けて働き始めました。家族総出で働いてくれました。我々の寄付金と同じくらいの寄付金が集まったそうですが、それ以外に本当に多種の寄付があったそうです。ヒルトンホテルは日本選手のホテル代を無料にしました。ある会社はメリケン粉を沢山寄付し、別の会社はパーティーのケータリングを寄付しました。いずれにせよ、多くの現物支給的な寄付があったそうです。

オジュバーさんは本当に一生懸命働いてくださいました。佐々木杯の受付は、奥さんと娘さんが担当されていました。Tシャツを作ったり、特製ワインを作ったり、いろんな試みもされました。それを黙々となさされ、本当に頭が下がる思いがしました。また、私の友人のチョルゴさんも、忙しい中、いろんな側面でこの佐々木杯のために働いてくれました。

二つの町の訪問

私たちの訪問3日目は、エゲラグ (Egerág) とギョール (Győr) という二つの町を訪れました。エゲラグは、ハンガリーの南にあり、ブダペストから車で3時間ぐらいのところですが、世界遺産でもあるペーチェという町のすぐそばの小さな町です。6月頃に皆さんにお知らせした「佐々木パゴダ」と呼ばれる柔道の屋外道場がここに建てられました。そのため、今回はエゲラグをぜひとも訪れてみたいと思っておりました。

11月3日の朝9時、日本人選手団8名と昭子さんと通訳の山賀さんという方と私の総勢11名、それに大きな荷物が、あまり大きくない小型マイクロバスにぎゅうぎゅう詰めで乗り込みました。運転手の方は、朝6時にエゲラグを出てはるばるブダペストに来られたそうです。この方は、その後丸一日バスに乗り、私たちを最後の町のギョールに送ったあとエゲラグに戻られました。ブダペストもギョールもハンガリーの北の方の町でエゲラグは南の国境近くですので、この運転手の方は、その日、ハンガリーを南から北まで、2回縦断往復されたことになります。

ハンガリーの11月は、寒くはなっていましたが、晩秋の晴れた日という感じで、車中から見る紅葉や広くすっきりと開けた畑は、とてもきれいでした。日本のような高速道路脇の休憩所はありませんが、ガソリンスタンドで時折停まり、トイレに行ったりドリンクを買ったりしてのドライブでした。



図15：佐々木パゴダと柔道着を着て整列して待っていたくれた地元の子供たち。